

対談

教育におけるポピュリズムと政治

山 本 圭・小 玉 重 夫

《基調報告》

指導者民主主義2.0に向けて？

——ポピュリストと政治的カリスマ——

山本 圭

0. 自己紹介

今回はこのような貴重な機会にお招きいただき、小玉先生、皆さん、本当にありがとうございました。私自身、出身学部が、今はもうありませんが、神戸大学の発達科学部というところで、そこで白水浩信先生にたいへん世話になりました。さきほど小玉先生に伺ったところ、白水先生は後輩に当たるということでした。そちらでミシェル・フーコーなどを読んだりしたことを懐かしく思い出します。

そのあと、大学院からは名古屋大学に行き、布施哲先生のもとでエルネスト・ラクラウやラディカル・デモクラシーの研究をすることになりました。博士号を取った後、最初の就職先は、岡山大学で教育学部（政治学担当）に着任しましたので、教育学部にはなんだかんだご縁があります。現在は立命館大学に移り、研究、教育を続けています。もうすぐ新しい本を出せるよう準備しているところで（山本2020）、機会があればそちらにも目を通していただければと思います。

本日の話のタイトルは「指導者民主主義2.0に向けて？—ポピュリストと政治的カリスマ—」にしています。まとまった報告というよりは、最近考えていることをざっくばらんにお話しし、いろいろご意見をいただければと思います。「指導者民主主義」といえば、ずいぶんと以前では、マックス・ウェーバーの議論を中心に、人民を指導するリーダーの存在が政治においても民主主義においても重要だという議論がされていたことがあります。しかし近年で

は、こうした垂直的な指導者の存在は民主主義論ではかなり評判が悪い。そこで今日の話は、いまでは忘れられたこの指導者論を、現代にふさわしい形でどうやってアップデートして、引き受けることができるのか、あるいはできないのかという辺りを考えてみたいと思います。

1. 問題の所在

このかん、ポピュリズムをめぐる議論があちこちで賑わっており、いわゆる「第三の道」路線に代表される中道政治と新自由主義が、とりわけ金融危機以降、少なくともイデオロギーとしては退潮しています。そこで2010年代以降、イギリスやアメリカ、南米のブラジル、東欧のハンガリー、さらにドイツ、フランスもそうですが、いろんな所で右派的なポピュリズムが台頭してきました。

右派だけではなく、左派のポピュリズムについても盛んに言われ、なかでも注目を集めたのがギリシアのシリザでした。彼らは2015年に政権を執り、「反EU」、「反緊縮」を強く押し出しました。それに続かたちで、スペインのポデモスのパブロ・イグレシアスが台頭し、注目を集めました。最近では、イギリスの労働党のジェレミー・コービン、アメリカの民主党の、バーニー・サンダースが「左派ポピュリスト」として期待されたのが、このかんの情勢の推移です。

とはいえ、左派ポピュリズムは最近（2020年1月時点）ではあまり振るわず、シリザは2019年の選挙で下野して第2党に落ちました。スペインのポデモスも連立政権入りを果たしましたが、議席はかなり減らしています。先月のイギリスの総選挙では、コービン率いる労働党は大敗しましたし、サンダースも健康不安などもあり、どこまで駆け抜けられるのかはやや心配なところですが、いずれにせよ、こうした右派と左派のポピュリズムのぶつかり合いのような状況を、シャンタル・ムフは、「ポピュリスト・

モーメント」と呼んでいます。

こうした背景のもと、ポピュリズム論が、政治学においても、関連分野においても、あちこちで関心を集めています。しかしこのかん、あまり問われていないと思われるのが、政治的指導者と民主主義の関係です。右派ポピュリズムの文脈ではポピュリストの分析はしばしば見られるようですが、左派ポピュリズムではあまり出ません。

これまでの民主主義論は、どちらかといえば人々の水平的な関係に注目してきましたが、水平的でない垂直的な関係を、今、民主政治においてあらためてどういうふうに捉えたらいいのだろうかという問いが抜け落ちているのではないか、これが本報告が出発点とする問題です。

2. 左派ポピュリズムとは何か？

この問いをもう少し文脈化するために、シャントル・ムフの『左派ポピュリズムのために』(明石書店)という本を紹介します。この本で言われていることを一言で要約すると、「このかん、欧州連合や各国政府が進めてきた新自由主義的な緊縮政策によって、新しい少数者支配が生じている。中間層は痩せ細り、大多数の人々は政治的に無力化され、自由民主主義は今や『ポスト・デモクラシー』的な状況にある。この局面において左派は、ポピュリズム戦略に訴えることで、既得権益層に対抗する勢力をまとめ上げ、自由民主主義を回復しなければならない」ということになるでしょう。

ヨーロッパなどにおいては、かなり深刻な状況にあるようです。たとえば最近話題になった映画で、ケン・ローチの「家族を想うとき」があります。この映画では、ウーバーイーツやアマゾンの配達員のようなギグエコノミーが取り上げられており、そこで働く人々は労働者階級のようなまとまりを形成することなく、分断された状況に置かれています。また、そういった職業に従事する人には移民が多く、従業員同士でのコミュニケーションもままならず、中間層どころか労働者階級も痩せ細っています。

ムフはそうした状況をふまえて、左派ポピュリズム戦略の有効性を説くわけです。ポイントをまとめます。まず彼女は「現状維持(純粋な改良主義)でもなく、かといって革命主義でもないラディカルな改良主義」として左派ポピュリズムを位置付けて

います。つまり左派ポピュリズムは見た目ほど革命的なものではなく、あくまでも改良主義的なものであるということです。

第二に、ムフは国民国家を再評価しています。それによると、左派ポピュリズムはネーションの右派的な同一化に倣うことなく、「国民的な伝統の、最良で一層平和主義的な側面であるパトリオティックな同一化へと人々を動員」(97頁)しなければならないということです。これは戦略的にナショナリズムに訴えると同時に、国民国家というフィールドが左派ポピュリズムの主要な舞台になるということでもあります。

第三に、政治理論で近年注目されているロトクラシー(くじ引き民主主義)への批判があります。ムフの理論からすると、ロトクラシー論者(たとえばレイブルック『選挙制を疑う』(法政大学出版局)を参照)は代表を選挙に還元し、政党や代表制度がもつ役割を過小評価してしまいます。政治においてはやはり、ヘゲモニー闘争のなかで集合的アイデンティティを構築していくことが大切なんだ、そのプロセスに代表や政党政治はなおも不可欠だというわけです。

第四に、左派ポピュリズム戦略をエコロジーの問題にからめている点です。ムフは「野心的で、綿密に計画されたエコロジー的プロジェクトは、未来の民主社会について魅力的な展望を提示する可能性を秘めている」(84-85頁)と述べています。つまり、この問題を中心に左派ポピュリズム戦略を打ち立てることで、現在は新自由主義的なブロックに統合されているセクターをも引き込むことができるかもしれないというわけです。このあたりは、アメリカの民主党において、とりわけサンダースやアレクサンドリア・オカシオ＝コルテスが、グリーン・ニューディールというかたちでエコロジー問題を前面に押し出していることにつながるでしょう。

さて、ポピュリズムは様々なイデオロギーとセットで現れることが多いですが、概して右派ポピュリズムが権威主義的かつトップダウンなポピュリズムであるのに対して、左派ポピュリズムは、社会運動の重要性を強調するような、ボトムアップ型を目指す点に特徴があると言われます。しかし、こういった議論の中でやはり気にかかるのは、社会運動中心の左派ポピュリズム論における指導者の問いの不在です。リーダーシップやリーダーは、あらためてど

ういうふうにポピュリズムと、あるいは民主主義との関係において考えることができるのか、そういう問いかけがあまりなされてきませんでした。

3. 指導者と民主主義

(1) マックス・ウェーバーの指導者民主主義論

さて、指導者民主主義と言えばやはりマックス・ウェーバーです。近代社会の宿命である官僚制化においては、ウェーバーの言葉で言うところの「指導者なき民主主義」が宿命のように立ち現れてこざるを得ない、しかし、それにどうやってあらがっていくのが、ウェーバーの関心の中心にありました。

ウェーバーが着目するのは、強力なリーダーシップを持った政治家の存在であって、それが官僚制の行き過ぎを抑えることを期待していました。そこから出てくる悪名高い「人民投票の指導者民主主義」（「指導者民主主義」あるいは「カエサル主義」とも呼ばれる）と言われるものが、マックス・ウェーバーの民主主義論として知られるものです。指導者民主主義の構想は、ビスマルク亡きあと、いかにして強力な指導者を生み出すのかという問いへとつながり、それに対するウェーバーの答えの一つが、人民投票によって選出されるライヒ大統領制でした。人民投票を通じて、強いリーダーを選出して、それにより官僚制に対抗させるというものです。有名な『仕事（職業）としての政治』では、「ところで、ぎりぎりのところ、道は二つしかない。マシーン（政党）を伴う指導者民主主義を選ぶか、それとも、指導者なき民主主義か」という、かなりインパクトのある二者択一が示されています。

(2) 指導者と大衆

ウェーバーにとって、政治的指導者は何より闘争するし、必然的にそうしなければならない。熟議ではないのです。政治家は権力を求める人物であり、さらに政治家の資質として、情熱、責任感、目測能力が特に必要であるといえます。つまり、政治家は、情熱を持って事柄にコミットメントし、自らの行為に責任を持ち、物と人との適切な距離感を掴んでいる必要であります。これについては「政治というのは、硬い板に力強く、ゆっくりと穴を開けていく作業です。情熱と目測能力を同時に持ちながら掘るのです」(217頁)という有名な一節があります。

同書によると、選挙権の民主化と政党の近代化に伴い、権力が地元の名望家や個々の議員から、政党の頂点に居る少数者ないし指導者に集中していきます。つまり、人民投票的なデモクラシーが確立され、「選挙という戦場における独裁者の台頭」が、普通選挙の実現によって起こります。そして、「この独裁者は、『マシーン』を介して大衆を自分の後ろに従える。そして、この独裁者にとって、議員などは、彼の支配下にある政治的なサラリーマンにすぎなくなります」(161頁)。

他方、ウェーバーが大衆をどう見ていたのかということですが、「新秩序ドイツの議会と政府」という論考には、「政治上、受動的な《大衆》が、自分たちの中から指導者を生み出すのではなく、政治指導者が従士団を徴募し、『デマゴギー』を通じて大衆を獲得する」とあります。ウェーバーにとって大衆というのは、あまり信頼の置けない頼りない人々のことであって、このような見方はこの当時の知識人には珍しくありません。

指導者が大衆を指導していく、場合によっては支配するということが、ウェーバーにおいては、かなりはっきりと肯定されています。人民投票の指導者民主主義は、大衆の熱狂的な支持から正当性を引き出して、これは、ウェーバーで言うところのカリスマの支配に近いものです。強大なカリスマ的資質を備えた指導者のみが大衆を導き、官僚制を政治に従属させるというわけです。

(3) 指導者とカリスマ

ここでカリスマという概念に着目してみます。カリスマというのは、もともと、魔術師、預言者、指揮官、賊の親分、傭兵隊長という、宗教的、軍事的なコンテキストで歴史上生み出されてきました。ウェーバーがカリスマ論を論じていくとき、ルドルフ・ゾームの『教会法』の影響を受けていることが知られています。ゾームにとってカリスマという概念は、宗教的な指導者のもので、奇跡を起こすことで同一化の対象になるような、そういった超越的かつ宗教的なカリスマの指導者でした。ウェーバーは、ゾームの研究を踏まえつつ、それを政治的な指導者、政治的なカリスマへと読み替えていきます。そして、「このような（カリスマ的な）資質を持つために、その人物は、ほかのなんびとにも近づきたいような、超自然的または超人間的な、あるいは

すくなくとも、とくに非日常的な力とか特性をもった者とみなされるか、それとも、神からつかわされた者とか模範とすべき者と考えられ、また、それゆえに、『指導者』として評価されるのである。(…)肝心なのは、それが、カリスマの支配下にある人々、つまり、『信奉者』によって、じっさいにどのように評価されるか、という点だけである」(『権力と支配』83-84頁)と、ウェーバーは、カリスマを持った政治指導者のことをこう描き出しています。カリスマについてはまたのちほど立ち返ります。

(4) 指導者民主主義への懷疑

ところで、ウェーバーの指導者民主主義に対しては、戦後、ウェーバー研究者たちから懷疑と批判が突きつけられるようになります。代表的なものがヴォルフガング・モムゼンの『マックス・ウェーバーとドイツ政治 1890-1920』です。彼は、ウェーバーの人民投票的民主主義の構想がカール・シュミットにつながるとし、ウェーバーのナチズムに対する責任を指摘しました。この議論はたいへんな反響を呼び起こし、「モムゼン・ショック」とも言われます。マックス・ウェーバー業界が大騒ぎになり、ウェーバーの戦争責任について1970年代、1980年代を通じて、さかんに議論されていたようです。

日本でも佐野誠先生が、『ヴェーバーとナチズムの間一近代ドイツの法・国家・宗教』(名古屋大学出版会)で、「真正カリスマ(独裁的、権威主義的なカリスマ)」と「民主的なカリスマ」をウェーバーは区別していたとし、ウェーバーの狙いが後者の民主的カリスマ的であったとして、モムゼンに反論しています。つまり、人民投票的に正当化された大統領も、市民的法治国家の憲法規定からは自由ではないと、ウェーバーを擁護するわけです。これは一例ですが、ウェーバーとナチズムの関係については様々な議論が積み上げられてきました。

(5) カール・シュミットの喝采論

そういうわけで、マックス・ウェーバーの指導者民主主義と関係の深いカール・シュミットの喝采論を取り上げることにしましょう。ハーバーマスもシュミットのことを「マックス・ウェーバーの嫡出子」と呼んでいます。シュミットが独裁と民主主義は両立するとしたことはよく知られるところでしよう。

さてシュミットは、『現代議会主義における精神的地位』第2版の序文の中で、秘密投票に代わる人民の意思の形成手段として、「喝采」の意義を強調しています。シュミットによれば、秘密投票は自由主義的であり、一人ひとりがばらばらにされ、それ自体としては民主主義的ではない。むしろ民主主義にふさわしいのは、人民の一体感のある喝采のほうであるというわけです。「人民の意志は、半世紀以来、極めて綿密につくり上げられた統計的な装置によってよりも、喝采によって、すなわち、反論の余地を許さない自明のものによるほうが、むしろ一層よく民主主義的に表現され得る」(25頁)、彼はこう書いています。

シュミットの喝采についての議論には、ボン大学での同僚であったエリック・ペーターゾーンから影響があります。ペーターゾーンは、古代史研究を通じて、奇跡に感嘆する人々の喝采を描いており、シュミットは『国民票決と国民発案』においてこれを高く評価しています。全文を引用しておきます。

「国民に最も固有の活動・権限・機能・国民の意思表示全ての核心、民主制の根源現象、ルソーも、本来の民主制ということで念頭に置いていたもの、それこそが喝采であり、集合した大衆の賛成ないし反対の呼び声だからである。国民は指導者に対して喝采を送り、群衆(……)は、将軍や皇帝に対して喝采を与え、国民同胞の『参会者たち』、または州民集会は提案に対して喝采で応える(……)。高い声を出したり低い声を発したり、歓声を上げたりブーイングをしたり、武器と盾を打ち鳴らしたり、武器を盾の上へ上げたり、ある決定に対して何らかの言葉とともに「アーメン」と言ったり、沈黙によってそうした喝采を否定したり」(『国民票決と国民発案』53頁)

(6) 忘却の指導者民主主義？

ウェーバーとシュミットのあと、1940年代になるとシュンペーターが、ウェーバー＝シュミットラインの指導者民主主義を、「競争型エリート主義」というかたちでリベラル・デモクラシー化します。シュンペーターは、一人の指導者というよりは、複数の指導者が大衆の票をめぐる競争こそが民主主義

義であり、民主主義とはそれ以上でもそれ以下でもないというわけです。

かなり大雑把な話にはなりますが、その後、シュンペーターの影響を受けたものとして、政治学分野ではロバート・ダールのブルーリズムが挙げられるでしょう。ダールはシュンペーターをかなり読み込んでいました。彼は、アメリカにおける権力資源がどのように分布しているかということ、ニューヘブーンという町で実証的に調査しました。ある種のアメリカ型のブルーリズム（多元主義論）の元祖ともいえる研究ですが、ポリティカルサイエンスのなかにシュンペーターをエレガントな形で落とし込んでいったのがダールです。そういったなかで、シュンペーター＝ダール枢軸のようなものがしだいにできあがり、民主主義は良くも悪くもエリート、あるいは多元的なセクターや利害関係者あいだの競争であって、それぞれがせめぎ合い、自分たちの利益を最大化すべく競争をしているというような話になります。

しかし、1970年代になるとキャロル・ペイトマンが『参加と民主主義理論』という本を書き、シュンペーターのエリート主義的な民主政治を批判しました。おおよそそれ以降、熟議民主主義論であれラディカル・デモクラシーであれ、あるいはシティズンシップ論や公共性論でもそうですが、この50年間ほどは市民参加ということがさかんに語られ、こうしたコンテキストのなかで指導者についてはほとんど語られないか、あるいは懐疑的に見られるようになりました。

そういうわけで、私の見立てとしては、指導者の問いは、その後の民主主義論の歴史のなかで、忘却・抑圧されてきたということです。政治的主体や市民についてはポジティブに語られるものの、そのなかで大衆を導く、あるいは市民をまとめる指導者については沈黙されてきたということです。私は、この指導者民主主義という、自由民主主義の揺籃期にあった構想に強い関心をもって、これをどうにかして引き受け直すことには、それなりに意義があると思います。

4. カリスマ論の射程

指導者民主主義論のなかでも、私はとりわけカリスマという概念に惹かれています。さきにも少し言及したように、カリスマという概念はいろいろな理解をされてきました。例えば、フランツ・ノイマンは、『ビヒモス』の中で、指導者のカリスマは、「そ

の有用な働きのゆえではなく、彼の自称する個人的資質のゆえに、指導者への服従を求めるのである」(88-89頁)と批判的に述べています。

また、ロジェ・カイヨワは『聖なるものの社会学』において、聖性や宗教的な呪術のようなものからめつつ、「カリスマ的権力は、依然夢遊的・催眠的・眩暈的・法悦的な力として存在している。現代社会の厳格さや複雑さから、こうした支配の仕方とはとも考えられないと思ってはならない。それどころか、これらはかえってその効力を増大させているとも言える」(124頁)として、カリスマの現在性について言っています。

また、カリスマの危うさを指摘する議論に対し、むしろそこにポジティブな意味合いを見いだそうとする議論もあります。ニュースクール(The New School for Social Research)にアンドレアス・カリヴァスという人が居ます。彼は*Democracy and the Politics of the Extraordinary*という本の中で、ウェーバーのカリスマ論の「集合的解釈」に着目し、その民主主義的な意味を探るというような試みをしています。従来の流れを切断する、あるいはアレントがいうところの「はじまり」のように、これまでの因果のようなものを切り離して新しく何かを創設するカリスマの特殊な力に注目して、それを「政治的なもの」として捉えようとしています。

ほかにも、ビンセント・W・ロイドは、*In Defense of Charisma*という本の中で、カリスマにも、ヒトラーのような悪いタイプとキング牧師のようないいタイプの2種類があると言います。前者は権威主義的カリスマ、後者は民主的カリスマとして、後者を評価しています。

もう少し古典的なものでは、ベンヤミンのaura論もカリスマ論として読むことができます。たとえば複製技術論ですが、複製技術に対する今ここの一回性としてのauraにはカリスマ的などころがあります。ベンヤミンのaura＝カリスマに対する両義の評価に関しては、道簇泰三先生が「アンビヴァレンツとしてのカリスマ」(『大航海』2002、No.41、151頁)という論文で、「現代のカリスマなるものがもし存在するとすれば、それは、カタストロフのうちにある自らをしかと見据え、究極的な自己崩壊のうちに自らの言葉を語り出すことによってしか、その真に創造的な内的起爆力を発揮できないということである」と述べています。

いまはまだメモというか、引用の羅列のようなものですが、いずれまとまったカリスマ論を準備できればと考えています。

5. 近年の民主主義論におけるLeadershipへの再注目

以上のような指導者民主主義論のとらえ直しは、近年の民主主義論におけるリーダーシップへの再注目と接続できると思います。

たとえば、エルネスト・ラクラウは、フロイトの『集団心理学と自我の分析』の読解をしつつ、同輩者の第一人者としての指導者との同一化が集団を形成すると議論しています。そして、「空虚なシニフィアン」や、ラカンの対象aによるラディカル・デモクラシーやポピュリズムの議論も、そうした指導者論と必然的に結びついていきます。

他方で、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートの議論でも、「アセンブリにおけるリーダーシップの再評価」がされ始めています。ただ、それはリーダーが偉くてマルチチュードは偉くないというヒエラルキーを逆転させるという条件付きです。大まかな方向性として、戦略はリーダーが、戦術は運動（マルチチュード）が、という従来のヒエラルキーを反転させて、戦略を運動（マルチチュード）の側に、戦術をリーダーにという方向性を打ち出しています。つまり、主導権はあくまでマルチチュードの側にあるということです。たとえばある指導者が倒れたら左派ポピュリズム運動が霧散してしまうようでは駄目で、むしろ、その運動が残っている限り新しいリーダーはいつでも取り換えがきくような循環を作り出すことが望ましいという話でもあります。

とはいえこれは、ネグリ＝ハートのこれまでの「指揮者なきオーケストラ」としてのマルチチュード路線からは、小さくない転換です。近年のネグリ＝ハートの議論では、組織論の必要性が強調されるようになっていきます。その文脈で、ネグリ＝ハートはシュンペーターのアントレプレナーシップという議論を再評価しています。シュンペーターは、イノベーションを起こすような人物をアントレプレナーシップと呼んでいましたが、アントレプレナーシップはあちこちのビジネス書でも見られます。

ですが、シュンペーターはあるところで、アントレプレナーシップは職業ではなく、革新的な事

業か何かをやっている人が、その瞬間においてアントレプレナーシップなのだというようなことを言っていて、そうするとアントレプレナーシップはいつも資本主義と一緒にいうわけではない。むしろ、資本主義の側からアントレプレナーシップという概念を引き離して、マルチチュードの創造的な仕事に節合すべきというような話をしています。ちなみに先月、「ニュー・レフト・レビュー」(No.120, 2019)にMichael Hardt and Antonio Negri, "Empire, Twenty Years On"という論文が出ていましたが、これは『帝国』が刊行されてから20年を記念する論文です。そこでも、組織論の必要性が語られていて、持続性を持った運動をいかにして組織化するかがということが重要な問題として挙げられています。

このように、ネグリ＝ハートですら、近年リーダーシップに注目しています。したがって、指導者民主主義をウェーバー＝シュミットのラインだけで捨てるのではなく、100年かけてもう一度注目が集まっている指導者の概念を再評価し、それをどうやって民主主義論のコンテクストに落とし込めるかということが、大きな課題になると感じています。



《コメント》

山本報告に対するコメント

小玉 重夫

小玉です。今の山本先生の基調報告に対するコメントを行うにあたり、『不審者のデモクラシー』（山本 2016）及び、それ以降の議論が、私自身が考えてきたこととどう絡むのかを話すという意味で、最近書いたものを二点ほど資料として配布して（小玉 2018、小玉 2019）、まずそれに沿って話し、そのうえで、山本さんへの直接のコメントを行いたいと思います。

1. ポストトゥルース

一つは、ポストトゥルースという話で、これは、山本さんの言っている「ポスト基礎づけ主義」という話とかなり重なり合う部分があるのではないかと考えています。それは、1 個目の資料（小玉 2018）で、これは、デリダの『マルクスの亡霊たち』という本を去年のゼミで読みましたが、それに触発されて書いた論文です。ポストトゥルースというのは、冷戦終結以後の知的な世界を覆っているある種の反知性主義というものの別様の言い方で、特に、2016年の政治的な変化、端的に言うと、トランプ政権の誕生、イギリスにおける国民投票でブレグジットが決定したことに象徴されるような出来事を表しています。

この論文で私が言いたかったのは、ポストトゥルースは結局、反知性主義だから駄目で、やはりエビデンスベースで実証主義的な合理的な知性というものを復権させて、それに基づく政策をしなければいけないというかたちで、ポピュリズムとかポストトゥルースに対してエビデンスベースの議論を対比するような、ポピュリズム批判と実証知の擁護を絡めて主張する動きが近年の人文社会学的な知の世界を覆っているような気がしています。

例えば、大学入試センター試験の廃止をめぐる民間試験の導入と記述式試験の導入が撤回された事例がありました。それを受けて、一部の研究者たちが、「センター試験に戻せ」みたいな声明をあげていますが、あれに対して、別様の議論ができないだろうか、ポピュリズム論の立場から、何かお知恵が

あればお聞きしたいと思っています。

学校教育は、もともと現実世界との関係で言うと、現実世界を批判するある種の未来を先取りする科学的な知性のたまり場みたいなもので、そういうかたちで、学校の知というのは制度化されてきました。しかし、それが揺らいでいるときに、そういう知的な、合理的な世界としての学校をもう一度復権させるのではなくて、むしろ、学校が持つ可能世界や虚構世界としての可能性を評価できないかという問題意識です。学校の内側の世界と学校の外側の現実世界が相互浸透し科学知としての学校の知性の優位性が崩されている中でポストトゥルースの時代が到来していると考えたとするならば、予見不可能な偶然性の世界を縮減して予見可能なものにしていくという方向性で知性を再構築していくのではなくて、むしろ逆に、予見不可能な偶然性に定位する形で来たるべき民主主義の芽を見いだしていくことができないだろうか、ということです。

これはアレントのいうプラトン主義批判でもあり、プラトン主義が亡霊を追放することで近代的な学問をつくってきたとするならば、それに対抗するような知の在り方を可能世界と現実世界の相互浸透のただ中で、来るべき民主主義の可能性として見いだすことができるのではないかと考えています。この話は、大きな方向性としては、山本さんが言っているポスト基礎づけ主義の段階におけるカリスマの復権、新しい形での指導者民主主義のバージョンアップということと恐らくつながるのではないかと考えています。

2. そこでの教師のイメージ

もう一つは、2 番目のほうの資料（小玉 2019）で、ポストトゥルースの時代の教師のイメージ、山本さんの話でいうと指導者のイメージは何なのかという問題です。合理的で啓蒙主義的な知性に戻るのではないかたちで、新しい知性を組み替えていくときの学校における教師のイメージはどういうものかを考えたいと思っていたので、今年（2019年）度の前半のゼミでは、ランシエールの『無知な教師』（法政大学出版会）を読みました。

ランシエールが言っている無知な教師とは何かというときに、ポイントになるのは、知性と意志の関係の問題で、これまでの学校教育が知性によって生

徒を愚鈍化させてきたときの基本的な論理の組み立ての構造は、知性によって意志が支配されるという構造です。

ランシエールは、「説明体制」という言い方をしていますが、知性の「ある」人が知性の「ない」人に説明する構造によって教育的関係が再生産されている限り、結局、「あなたたち、愚鈍な人たちでしょ」という関係性は、再生産され続け、愚鈍化の循環構造から抜け出ることができないといえます。

そこから抜け出すためにはどうしたらいいかというと、「優れた」知性を持つ者が「劣った」知性を持つ者を支配するという構造そのものを変えていかなければいけない、そのためには、知性による知性の支配という構造を変えなければいけないということになります。無知な教師がそれまでの教師と違うのは、教育をしている相手を知性が劣っている存在として見なすのではない教師、相手の知性を自分の知性によって支配するのではなく、相手の知性をその人自身の意志に従属させるような教師、「探究者をその人自身の道、その人がたった独りで弛まず探究し続ける道に引き留めておく者である」点にあるといえます。

従来の教育は、知性に意志が従属している関係でした。つまり、学ばなければいけない知的なものがあって、それに従属するものとして生徒の意志がある。知性に意志が従属する関係を前提として、「優れた」知性が「劣った」知性に対して教育する説明体制が構築されているので、そういう構造を変えずに教育的な関係が再生産されていくと、結局、愚鈍化の構造がより強まっていくわけです。この知性と意志の関係を逆転させて、意志に知性が従属するような関係にしなければいけない。

それによって、注意深く探究的な意思に知性が従属するような関係に持っていく。そうすることが、ランシエールのいう理性逸脱に陥らない、つまりは、反知性主義としてのポピュリズムに陥らない、無知な教師としての教師の有りようだとランシエールは言っているのではないかと考えました。そういう教師の有りようは、ポストトゥルースの時代における一つの教師の在り方として考えることができるのではないかと考えています。

これは、今日の山本さんの話で言われた「指導者民主主義20」という話と絡むのかと思いますが、この点は次にあらためて触れます。これが二つ目の

話です。

3. 複製技術論と公共性論の架橋

以上の議論と関わって、本日の山本先生のお話の中では、カリスマ論との関連で、ベンヤミンのアウラの話をしています。それから、大衆民主主義における指導者の問題が全体主義における指導者の問題とどう違うのかということ、で、「権威主義的なカリスマ（ヒトラー）」VS「民主的カリスマ（キング牧師）」という区別の話が出ています。

ここでは、アウラにせよ、カリスマにせよ、両義的だということがポイントで、ベンヤミンのアウラ論というのは、カリスマ論ともつながって、両義的な評価というところが絡むのではないかと言われました。

ここをコメントすると、アウラ論とカリスマ論を結び付けてベンヤミンの議論の両義性をひき取る際には、アウラの消失論が前提となるのであって、この点で、ウェーバーにおけるカリスマ論の両義性とは一線を画する必要があるかもしれないと思いました。それはどういうことかということ、今、この一回性としてのアウラの肯定性をより強調していたのは、この問題でベンヤミンと論争したのアドルノで、アドルノの言っている、「今、この一回性としてのアウラ」という話の方が、シュミットとか、ウェーバーが言っているカリスマという話と恐らく順接的につながる論点だと思います。

それに対して、ベンヤミン自身は「両義的評価」と言っても、どちらかということ、複製技術によってアウラが消失して、大衆社会の芸術みたいなものが広がっていくということは、「消失」するがゆえの肯定性であるということにポイントがあり、アウラの消失それ自体に否定的なアドルノたちとは異なるので、カリスマとかアウラという概念を「指導者民主主義20」を考えるとときの概念的リソースとして使う場合、取扱注意で、文字通りのリソースとして使うのか、逆説的に使うのかを吟味する必要があると思いました。

先ほどの私の2番目の論点と絡めて言うと、全体主義とランシエールやベンヤミンとの違いが何かということ、全体主義は、結局、指導者の知性に大衆の意志が従属している状態なのではないか。だから、アウラという問題もカリスマという問題も、結

局、指導者が持っている知性の中にアウラというものが体現されていて、そこに従属しているので、それらを喝采して、熱狂的に支持するという構造が生み出されるのではないかと思います。そのことを、ウェーバーとかシュミットは、肯定的に評価する可能性があります。

これに対して、ベンヤミンが複製技術論で言っている話は、逆に、指導者の知性を大衆の意思の側が組み替えていくみたいな話で、だからこそ、複製技術で芸術そのものからアウラが消えていくことは、イニシアチブが大衆の側に移ることとして肯定的に描かれるのだと思います。

そうだとすると、シュミットやウェーバーとベンヤミン、ランシエールとは、そこはかなり対立的な議論になるのかなと思います。例えば、香港民主革命で、最近、インターネットポピュリズムから日常性の市民運動に発展してきているという議論をしている人たち、宇野常寛さんとか、周庭（アグネス・チョウ）さんという香港の民主派の人たちがいますが、日常的な市民運動がインターネットポピュリズムに転化しないで、地道な運動として継続していくことを支えた条件は、ある種の民衆の市民化というか、ベンヤミンが言っている「芸術の政治化」に近いものを生み出しているからではないかと思います。それは、ある特定のリーダーが居ないことによって、香港の民主革命は継続したという議論にもつながります。

雨傘革命のときは、香港でも複数のリーダーが存在していて、そのリーダーをつぶせば革命は大体つぶすことができたので、雨傘革命は結局つぶれたといわれていますが、今、香港で起こっている民主派のデモは、特定のリーダーが存在しないデモなので、当局の側もつぶしにくくて、結構続いているのではないかという解釈があることから類推すると、この「指導者民主主義2.0」を駆動させるための条件として、ネグリ＝ハートのアセンブリともつながるのかも知れないですが、カリスマとかアウラを政治化（複数化）させる大衆の側の自立性みたいなものをもう少し見ていく必要性があります。

ベンヤミンが、「政治の美学化（カリスマ化）」に対して、「芸術（カリスマ）の政治化」というのを対比させて言っていますが、これをランシエールの言い方でパラフレーズさせると、「政治の美学化（カリスマ化）」としての大衆の意志の指導者の知性へ

の従属から、「芸術（カリスマ）の政治化」としての指導者の知性を大衆の意志に従属させる民主主義への転換を議論していけば、「指導者民主主義1.0」を「指導者民主主義2.0」へと更新させる条件につながるのではないかと思った次第です。

その場合の指導者のイメージは、ウェーバーとかシュミットの時代とはだいぶ変わってくるような気がするし、香港の例で言うと、雨傘革命の時代のリーダーとは違う、現在の香港の市民運動における指導者民主主義って何なのかということにも重なってくると思います。

4. 『不審者のデモクラシー』をどう読むか

コメントの最後の論点は、『不審者のデモクラシー』（山本 2016）それ自体に関わります。この本の第2章の所で、42ページに「重要なことはむしろ、人民＝民主主義的審問がいずれの言説にも節合され得ることを認めることなのである」と書いています。これは本書の全体を通底する視点で、ラクラウ、ムフが常々言っていることの重要な再確認だと思っています。

例えば、先ほど出た例で言うと、教育におけるアントレプレナー、フリースクール、学校選択の自由とか、いろいろありますが、そういう話をする、「ああ、それはネオリベだよね」みたいな感じで聞き取られてしまいます。「そういうことを言っているおまえは資本主義の手先だろう」みたいに打たれる議論です。それをラクラウ、ムフ流に言うと、「いずれの言説にも節合されるものとして見なさなければいけない」ということになるわけです。ネオリベ的な教師論とか教育論をはじめから否定せずに組み替えていくことが重要かと思っています。

それをさらに発展させると、「第5章」に「アゴニズムの隘路（あいろう）」という視点が提起されています。この章はムフ批判になっていて、アゴニズムというよりはアンタゴニズムではないかと。それが次の本のテーマになっていく（山本 2020）。

これは、教育学として引き取ることができる議論だと思いました。山本さんの議論によれば、ムフは、構成的外部に存在する敵対者を消去し、それを去勢するとか、むしろ対抗者という概念を立てることで闘技民主主義に組み替えて矮小（わいしょう）化していくので、学校教育で言うと、ディベート主

義みたいな話にも容易に転化されます。

もちろん、去勢されてディベート主義になるアゴニズムもあるかもしれませんが、去勢されず、アンタゴニズムの転位としてのアゴニズムみたいなものもあり得るはずです。しかし恐らく、ムフの議論は両者を区別する条件を理論の中にちゃんと装備しないまま、「概念が違いますよ」と言っているだけですから、いかようにでも使えます。教育学的に言えば、「ディベート主義もアゴニズムの一つだ」みたいな話になると、これはやはり、「ちょっと違うよね。ディベート主義は、どう考えても不審者のデモクラシーではないよね」という話になります。

そうだとすると、構成的外部としての敵対性を学校に持ち込む存在が、ある種の教える存在としての教師の中にあり得るだろうと思いました。だから、常に構成的外部の存在みたいなものを留保しつつ学校の中での関係性を組み替えていくときに、外部性を体現した存在が学校の中に居なければいけなくて、それはやはり教師の取り得る態度としてあるのではないかと。

これは、ガート・ビースタが『教えることの再発見』（東京大学出版会）という本の中で、「教える存在とは共同体の外部に居る人だ」という話をしていて、そこと接続可能です。そうすると、私が2番目のコメントで言った反知性主義を超える無知な教師の積極的なポジショナリティーもそこに付与することができ、優れた知性で生徒の知性を圧倒する存在としての教師ではなく、ある種の共同体の外部に居る構成的な外部を学校に持ち込む存在としての教師みたいな形に位置付け直すことができるのではないかと思います。

また、構成的外部としての敵対性を学校や市民社会の場に持ち込むような存在としてのある種の指導者像と「指導者民主主義20」の話は恐らく絡むと思いました。構成的外部者としての教師の具体的な例を挙げると言われても、すぐにぱっとは出てこないというのがありますが。

《討論》

山本 非常に重要な指摘を幾つもいただきましたし、教育学のコンテクストにもつながる論点をいただき、本当にありがとうございます。

まず、最初に言われた、予見不可能な世界を合理化していくエビデンス主義ではなくて、予見不可能なものを引き受ける知性はポスト基礎づけ主義的な議論として成り立つのかという点です。この話を聞いて思うのは、やはりランシエールにしても、結局のところ最後は探究的な姿勢を重視している。私が思い出すのは、ベンジャミン・バーバーも、参加民主主義の騎手のように思われていますが、アクティブシティズンシップという「やる気のあるやつしか認めない」みたいな話をしていて、探究者でない者のシティズンシップは一時的に制限するとまで言っています。ですから、私はそこに違和感を感じるようになりました。

「探究者と見なす」、「探究者にしていくんだ」ということ自体は、探究者になれる人だったらいいですが、それはかなり強い要求ではないでしょうか。たとえば大人数の教室で講義を聞いている学生のなかには、出席をとるわけでもないのにとりあえず教室にはくるわけですが、そこで真面目に話を聞くわけでもなく、スマホをいじっている人が必ず何人かは出てきます。そういった学生に対して、「探究者になれ」と言うときに、たとえ無知であることを肯定したとしても、つまりいわゆる知性のヒエラルキーとは異なる知性を想定したとしても、意思のヒエラルキーのようなものは依然として温存されたままではないでしょうか。フラットな知性を認めるならば、フラットな意志も認めるべきです。本当にやる気になれないような、あるいはモチベーションを見いだせないような相手とどのような対話が始まるのか、これは民主主義論としても興味深い論点に思います。

また、小玉先生はランシエールにひきつけながら、「意志に知性を従属させる」と言われました。これが本当に反知性主義への抵抗になるのか、やや疑問なところもあります。最近「ブレグジット（EU離脱）」という映画があります。これは、ベネディクト・カンバーバッチ

が、ビッグデータとアルゴリズムを使ってプレグジットを率いたドミニク・カミングスという人物を演じた映画です。その中の印象的なシーンで、人々を部屋に集めてプレグジット賛成派と反対派で自由に議論させますが、お互いがまったく異なる現状認識をもって、全然違う情報を信じつつ好き放題言っている。最終的に、それをオーガナイズしている人が立ちはじめ、「真実を言うよ」と言って、「移民はイギリス経済に全然ダメージを与えていないし、NHSにただ乗りしたわけではないし、むしろ移民がもたらす経済効果はこれだけある」というようなことをエビデンス式に出します。しかしその話を一通り聞いたあとでも、離脱派の人は「それでも・・・」と言い、全然納得しないわけです。これがまさに意志の勝利というか、揺るがない意志みたいなものであって、そういう状況で意志を優先させるというのは、反知性主義への対抗に果たしてなるのか、というのは小玉先生に対する質問になります。

他方で思うのは、最近私はケンブリッジ・アナリティカ関連の暴露本などを読んでいますが、人々は信じたいことだけを信じ、ある意味では意志に忠実に、離脱を選んだり、トランプを当選させたりしています。それは、「ポピュリズム」だったり「ポストトゥルース」だったり「反知性主義」と言われますが、一方で、これこそが民衆の知性ではないかと思うときもあります。

ケンブリッジ・アナリティカのような選挙コンサルタントは、データを活用し、誤った方向へと人々を動かしてしまったと批判されることがあります。しかし組合などの組織力も高く、様々な中間団体が政治家と市民との間の媒介になっていた頃がしばしば美化されて語られますが、しかしこのとき本当に人々の政治参加が自発的なものであったかというところかなり怪しい。「うちは代々〇〇党だから」、「うちの地域は〇〇党が強いから」、「うちの会社は上がこうやっているからこうやるんだ」という、結局これもまた、非自発的な政治参加ではなかったでしょうか？ たとえばイギリスでも労働党の強い選挙区は労働党が何十年も議席を守り、比較的安定していました。それが幸か不幸か、階級

も組合も含め、そういった中間団体がだんだん瓦解し、人々がアトム化されていったわけです。

それに代わり人々はいまや、自分たちでインターネットを使い、あるいはユーチューブを見ながら「今、EUってこうなっているんだ」と情報を得るようになっていきます。それがたとえ嘘だったとしても、ある意味で人々が自分で情報を取捨選択し、自分で意思決定しようとしたとも言えます。そうすると、たとえば労働者階級の家庭内でも、これまでは「うちは代々労働党だった」という家族が家庭内でEU離脱派とEU残留派に分かれたりするわけです。

これはおそらく、多くのリベラルな人たちからすると教育の失敗かもしれないし、嘆かわしいという評価が大勢だと思います。しかし一方で、たとえそれが嘘であったとしても人々が自分の信念を形成し、何かしら自分で政治参加をしたというのは、民主政治を字義どおりに考えると否定しきれないところがあるように思います。プレグジットの結果、イギリスの経済がたがたになって、ブーメランのようにその人たちの生活に響くかもしれませんが、そのコストも含めて学んでいくという息の長いプロセスが民主政治であり、もどかしいところでもあります。私自身、最近ポピュリズムを擁護した手前、反知性主義もそういった路線で擁護できるのではないかという気もしていますが、これはあまりに楽観的でしょうか（笑）。

ベンヤミンの_AURA論に関してはおっしゃるとおりで、_AURAがカリスマ的なものであったとしても、ベンヤミンの複製技術論は_AURAの消失を嘆いているわけではありません。むしろ、それによって写真や映画のほうに、大衆の革命的なポテンシャルを見出すんだということであって、_AURAの消失ないしカリスマの消失みたいなものを嘆いているわけではありませんね。アドルノとの関係も、もう少し注意深く見ていきたいと思います。

次に、『不審者のデモクラシー』に関するコメントを二つほどいただきました。アントレプレナーシップの話などが新自由主義だけに回収されるものではないという話をとりあげたように、いかに節合するかが重要であるというのは

まさにおっしゃるとおりです。等価性の連鎖やラディカル・デモクラシーですら、ネオリベ的だと批判されることがあります。マルクス主義的な階級主義的な人からすると、ラディカル・デモクラシーは「階級からの撤退」だというわけですね。けれども、ちょうどこの合宿でも、隣の部屋で社長塾をやっているようですが、あそこはたぶん指導者教育ないしリーダーシップ教育みたいなものをどんどんやっているわけですよ。まさに、「アントレプレナーシップ」とか「イノベーションが」などと言われていそうですが、さきほど紹介したネグリ＝ハートの議論は、まさにアントレプレナーシップの概念を、社長塾からこっちのゼミ室に取り戻さなければいけないという話なわけです。

もともとネグリ＝ハートは、『叛逆』（NHK出版）の議論まではエクソダス路線を採っていました。ですから、ヘゲモニー闘争から離脱してオキュパイするんだ、みたいな話をしていたと思いますが、最近では「それではだめだ」という感じで、ヘゲモニー闘争も重要だという方向へと議論が進んでいるような感じがします。だとすると、これは最近ずっと繰り返して言っていることですが、ラクラウ＝ムフのようなポピュリズム派とネグリ＝ハートのようなマルチチュード派は、言うほど対立していません。概念構成としては、違う言葉で同じようなことを言っているところがあって、その辺はもっと近づけられるはずだという感じはしています。

最後に、ムフ批判についてです。『不審者のデモクラシー』の第5章では、紹介していただいたとおり、敵対性と闘技を対比させて、「敵対性から退いてしまうムフの議論は不十分ではないか」という議論をしました。ただ実は、2月に出す新著（山本 2020）では、タイトルで「アンタゴニズム（敵対性）」を前面に出していますが、意外なことに、最終章ではアゴニズムを再評価することになっています。これまでは、敵対性をまさに反・基礎づけ主義的に持ち上げていましたが、私は、現代思想に近いところで仕事をしながら、やはり、どこかで政治学を意識せざるをえませんでした。つまり、「政治的なもの」の話だけで終わることができず、どこかで現実政治みたいなものも考えてしま

う。その結果、存在論的な敵対性にとどまることなく、存在的なレベルでアゴニズムを暫定的に再評価しています。ただ、それはムフが言うような「対抗者」というかたちよりも、アガンベンの内戦（スタシス）に引きつけつつ、アンタゴニズムとアゴニズムのあいだのような、もう少し別の領域として、そこに何か政治の可能性／不可能性みたいなものを見いだそうとしています。

最後に、小玉先生が言われた、構成的外部を持ち込む教師の態度という話で、まさに指導者像とどう関係するのかというところです。「無知な教師」に対して「無知な指導者」があり得るのかどうかは分かりませんが、それはさておき、構成的外部、つまり敵対性を持ち込む教師の態度は、どちらかというところ「非同一化」を促す存在であるということです。生徒に対して違和感を出したり、疑わせたりという関係を持ち込む場合、そのときの教師は、やはり同一化の対象というよりは非同一化の対象、あるいは異質な者として現れます。それに対して、私が指導者民主主義で少しこだわりたいと思うのは、「同一化」を引き起こすような指導者です。その点では、重なる部分と重ならない部分があるのではないかと思います。

この辺が難しいところです。あるべき政治とあるべき教育は、半分ぐらいはひょっとしたらパラレルに議論できるのかもしれませんが、どこかでそれていきます。構成的外部として現れる教師のような指導者は、政治的指導者としては考えにくい。敵対性を持ち込む指導者像は、教室の中における教師の役割ではあり得たとしても、政治的指導者としてはやはり「同一化」がキーワードにならざるを得ないのではないのでしょうか。

小玉 今の話で、一つは、山本先生は、「反知性主義を擁護したい」と言われましたが、その部分は、ニュアンスが若干違うかもしれません。つまり、これは、意志というものの内包をどのように考えるかということにつながります。ランシエールやアレントが言っている意志は、全体主義的な「総統の意志」のようなものから逸れていく部分があるように思います。アレント

は、ランシエールのように「注意」という言葉は使いませんが、意志については非常に強調しています。また、ランシエールは、「探究心」という言葉に結び付けているときは、かなり冷めた頭の働かせ方をしている状態を想定しているような気がします。

これに対して、反知性主義を擁護するようなかたちでの意志は、もう少しエモーショナルであり、かつ情動的な部分を強調します。ムフ自身が、そういうことを強調するタイプの人ではないかと思えます。たとえば、学校の行事で合唱コンクールをやって、みんなで盛り上がるのか、体育祭で組み体操をやって、その場が高揚するとか、そういう喝采や高揚感は、学校教育では、ものをすごく重視されます。

山本 そうですね。

小玉 ランシエールの言うのと、それは理性逸脱をもたらしやすいものですし、もう少し冷めた意志で知性を統制する、そういう主体をつくっていかないと、ちょっと危ないと思っています。

ベンヤミンが言っている「芸術の政治化」という話は、美的なものがエモーショナルな、情動的なものを動員することで全体主義をつくっていく「政治の美学化」に対する批判として出されているもので、政治は、そういうエモーショナルで情動的な動員に対して、複数性を対置するものととらえられると思います。

そうすると、ムフが言っている話は、かなり批判の対象になります。ラクラウは、ムフに対抗して『ポピュリズムの理性』という本を書いているところを見ると、その辺はムフよりも少し抑制されていますし、山本さんも、ムフよりはラクラウを持ち上げている感じだったので……。

山本 不審者本ではそうですね。ラクラウとムフを区別し、前者の可能性を探求したものでした。

小玉 そこが、『アンタゴニズム』の中では逆にムフへの回帰があるのかどうかという……、回帰ではないという話ですよ。

山本 私の理解だと、ムフはアゴニスティックデモクラシーから左派ポピュリズムへと立場を変えています。

小玉 変えているのですか。

山本 いったん、脇に置いている感じがします。

小玉 なるほど。

山本 アゴニスティックデモクラシーは、基本的に、「左と右をはっきりさせろ」という話だと思います。それに対して左派ポピュリズムは、上と下の対立を重視していて、基本的には別の議論です。ムフは、いったんポピュリズムへと歩みを進めることで、剥き出しの敵対性に対して別のルートから再接近し、そのうえで、アンタゴニズムの昇華としてのアゴニズムをあらためて取り戻そうとしているようにも見えます。ですから、ムフに回帰したかはおくとしても、前よりは少し甘めに(?)評価しているところがあるかもしれません。

小玉 今のところと関係しますが、「『指導者民主主義20』のイメージは、非同一化なのか、同一化なのか」と言ったときに、政治的指導者である以上、やはり、同一化のロジックは否定できないのではないかという話です。

山本 そうですね。

小玉 「20」になるからには、非同一化というかたちでの指導者民主主義があってもいいと思います。例えば、ヒトラーは、同一化の対象として存在していました。このように、20世紀的な政治的指導者は、同一化によって自分への支持を引き付けることで政治的な動員をして、支持を拡大していくイメージがあります。

それに対して、例えば、先日の「(NHK) 紅白歌合戦」で、最後から2番目にMISIAが出てきてLGBTの旗を振って歌いました。あのときに、SNSなどで研究者の界隈が賛成派と反対派に割れて議論になったことがありました。反対派は、紅白歌合戦は国民統合の装置であり、その中では、国民みんなが、「オリンピック頑張ろう」、「日本万歳」みたいな形に同一化していく。そういうイベントの中に、ああいうものが採り込まれ馴化されていると批判します。

山本 なるほど。

小玉 逆に、支持する人たちは、あれは、そういう国民的統合とか同一化みたいなものを、ある種、ハックするというか、むしろ組み替えていく契機として見る必要がある。LGBTのパフォーマンスをすることは、部分的にはあったとしても、全体としての国民統合のイベントを組み替えていくものだと思います。

後者の議論は、非同一化のモーメントとしてMISIAのパフォーマンスを評価しているのではないのでしょうか。必ずしも「MISIA万歳」みたいな感じでやっているわけではないというか、誰もMISIAに同一化しているわけではないと思います。例えば、嵐が出てきて歌うと、みんな嵐に同一化すると思います。ジャンプ的なパフォーマンスには、そういうところがあります。しかし、MISIAが出てきて歌を歌っても、多分、同一化はしません。

MISIAが不審者だとは言えないかもしれませんが、何か不審的な振る舞いをする事で、それに触発されて、自分自身が持っている固有性みたいなものに各人が気づきます。そういうリーダーシップのとり方も「指導者民主主義20」の中に取り込めないかと。

山本 なるほど。

小玉 非同一化を促すようなリーダーシップのとり方というか、「自分に同一化してほしい」というのではなく。

山本 そうですね。ラディカル・デモクラシーのコンテキストにおいては、同一性と同一化が区別されます。また、アイデンティティの政治がずっと行われてきたというのが前提にあって、ラディカル・デモクラシーにとってはむしろアイデンティフィケーション（同一化）が重要になります。アイデンティフィケーションは精神分析的な概念です。

基本的にラクラウの図式では、自分の欠如を埋めようとして同一化がおこります。しかし、その同一化は不完全で必ず失敗するというのが、ラディカル・デモクラシー界限が精神分析から受け取ったメッセージだったと思います。ですから、私のいままでの議論は、同一化は必ず不完全にとどまることを確認したうえで、同一化を引き起こす者としての指導者しか考えていませんでした。しかしいまのご指摘で、非同一化を引き起こす、あるいは同一化をずらす可能性に気がきました。知性と意思が簡単に分けられないのと同様に、同一化と非同一化も同時進行的なプロセスと捉えられるかもしれません。

MISIAはそうですね。おそらく、オリンピックへ向けたマジョリティなものの結集という

か、日本国民の表象を統一的に創っていくときに、ノイズを少し入れることで社会に対する非同一化が引き起こされるのであって、彼女自身が同一化を促しているわけでは必ずしもないと思います。

小玉 そうですね。

山本 例えば、映画の「ジョーカー」です。「ジョーカー」はまさに、理不尽な世界に対し人々の怒りを爆発させる。ここでは世間との非同一性を生み出すことが、同時に彼を神格化することになっています。伺っていて、両者は不可避的に結び付いている感じがします。

小玉 非同一化を引き起こす、あるいは同一化をずらす指導者のあり方は、教師のあり方としても教育学的に引き取らなければならない重要なテーマですね。そろそろ時間になりましたが、本日はとても意義のある討論ができました、どうもありがとうございました。

付記：本対談は、2020年1月11日に大学院小玉ゼミ合宿（神奈川県湯河原）で、立命館大学の山本圭准教授をお招きして行われた報告および討論の一部をテープおこしして、掲載したものである。大学院ゼミの内容と合宿の位置づけについては本紀要に掲載されているゼミ動向もあわせて参照されたい。ご多忙のなか、ゼミ合宿にお越しいただき貴重な話を下さった山本圭先生、およびゼミに参加した大学院生の皆様に感謝したい。（小玉重夫）

文献

- 山本圭 2016 『不審者のデモクラシー—ラクラウの政治思想』岩波書店
- 山本圭 2020 『アンタゴニズムス—ポピュリズム〈以後〉の民主主義』共和国
- 小玉重夫 2018 「ポストトゥルースの時代における教育と政治—よみがえる亡霊、来たるべき市民—」『近代教育フォーラム』27号
- 小玉重夫 2019 「無知な市民は反知性主義を越えられるか」『近代教育フォーラム』28号